薄れゆく意識

sanukisoba

女

　彼女が私のことをあまりよく思ってないのは知っていた。そのことで悩んだこともあるし、もしかしたら自分が悪いのではないかと思ったこともある。
　私が彼女の元夫と交際を始めたのは、彼女たちが離婚してから２年が経過したころ。もともと私たちは高校からの付き合いで、３人で食事にも行けば、旅行にも行く、そんな仲だった。
　私は中堅の女子大に進学し、彼女たちは同じ大学に進学。少しずつ私は彼女たちと距離が遠くなり、そして彼女たちは当然のように交際を始めた。もともと仲の良かった２人に私が合流したような３人組だったから、それはとても当然な流れだった。

　３人が無事に大学を卒業して間もないころ、彼女たちは籍を入れた。それもまた当然な流れであったし、誰も疑問を抱くことがなく、祝福を惜しまれなかった結婚。もちろん、私も惜しまなかった中の１人だ。
　彼女たちの生活がうまく言っていないことを知ったのは、祝福に満ちたスタートから３年が経ったあたりだろうか。珍しく彼女からかかってきた電話で、そのよ うな話を聞いた。その日私は久々の休日で、昼間だというのにカーテンを閉め切った部屋で午睡を堪能していた覚えがある。
　たっぷり２時間ほどの電話の中で、彼女はため息もついたし泣き声にもなったし腹立たしげな声も出した。心配はしたものの、どことなく遠い世界の話のようで興味が持てなかった私は、愛想を惜しんだ会話をしたのかもしれない。
　それから半年も待たず彼女たちは離婚をした。原因はどちらにあるわけでもない。話を聞いてみれば単純に関係が疲弊しただけの離婚。不貞とか暴力とか、華々しい話題とは無縁の別れだった。

　彼女の夫だった男から連絡を受けたとき、私は仕事も軌道に乗り、なかなか上機嫌な毎日な日々を送っていた。何年ぶりかに聞く彼の声はそれこそ昔とちっとも変わらず、懐かしさに惹かれて私は会う約束を取り付けた。そこからは、お決まりのパターンだ。

　彼と交際することで彼女に対し罪悪感をもったことは、ない。関係が破綻して制限がなくなった男性や女性と交際をするたびに、かつての恋人たちに罪悪感をもつなんて、そんな話はどう聞き耳を立てたところで聞くことのできない話だ。
　籍は入れなかったものの、私たちは一緒に暮らし始めた。どこでどう聞きつけたのかは知らないが、そのことを彼女が知った。罪悪感に近い感情を持ったとすれ ば、それはもっとうまく彼女に対して立ち回るべきだったということくらいだろうか。私が彼女に対してちゃんと説明をすれば、話は違ったのかもしれない。結 果を前にしての話ではあるが。

　彼女は私に対して怒りを覚えたようだ。彼女が私たちの暮らしを誰かから聞いたように、私も

誰かからそんな話を聞いた。

　彼を奪われた。

　私が相談したときにすでに奪うつもりだったんだ。

　私の目をごまかすために数年も待っていた。

　彼はだまされた。

　彼女はそんなことを、様々な表現と豊富なレトリックで言い歩いていたらしい。それも最近は過激になり、たくましすぎるほどの恨みを私に抱いているというこ とを風のうわさで聞いた。彼もそんな話を聞き不安になったのか、彼女に連絡を取ろうとしたりもした。私も連絡を取ろうとした。
　しかし彼女は自らの恨みを誰かにかき消されないためにか、決して私たちと連絡をとろうとはしなかった。

　もう連絡をとることは諦め、引っ越すなどして彼女の目の届かないところへいこうかと話を彼と始めたころ、手紙が届いた。
　宛名は私。消印はなし。
　手紙の中には、私がうわさに聞いたのと同じ内容の話が淡々と綴られていた。聞いた話と違う点があるとすれば、最後に「許さないから」という言葉が加えられていたことだろうか。

　その日私はたまたま仕事が遅くなり、終電近い電車で帰路に着いた。駅から５分ほど歩き、人が少なくなったあたりで私はなぜか、タクシーを拾えばよかったなと後悔した。いつもそれほど人が多いわけでもない道が、いつもより広く感じ、足をはやめた。
　家までもう少し、というところで私は背後に人の気配を感じる。
　「許さないから」
　懐かしい声が後ろから聞こえた。背中に衝撃を感じると、私の眼前に地面が近づいてきた。
　味わったことのないような苦痛に抱きしめられながら必死で視線を上げると、かつての友達が私を見下ろしていた。どうしてこんな目をできるのだろうと思うほどに乾いたその目の中には、何も存在していない。
　薄れ行く意識の中で「彼は返してもらうから」という声を聞いたような気がした。

妻。

　私の持っていないものを持っている人、彼女はそんな存在だった。かけがえのない友人ではあったけれど、彼女をうらやましがるあまり目障りに思ったことも ないわけではない。友人であるからこその嫉妬、彼女に対して優位に立ったときに感じる優越感。そんな気持ちを抱く自分はどこか醜い。
　彼女と知り合ったのは高校時代。幼馴染の彼と私は彼女の明るさとすっきりした性格に惹かれて３人でいる時間が長くなっていた。今、高校時代を思い返してみても私はもう戻ってこない時間に絶望するだけでひどくみじめになる。
　私と彼が同じ大学に進学し、彼女だけが違う大学に進んだとき私と彼はとても寂しがったけれど、彼女はいつもの明るさで「今生の別れじゃないんだから」と笑ってきた。あの笑顔が私たちをさらに寂しくさせたことを、たぶん彼女は知らない。
　彼女はいつもそうだった。公平で正しくて、そして自分が思ってもいないことを口にすることはなかった。その場その場で適当な笑顔を振りまいて一瞬一瞬を切り抜けてきた私とは違う。どうして彼女が私と仲良くなることを楽しんでいたのか、それは今でも疑問だ。

　私が彼と離婚して数年経ち、彼は彼女を選び彼女は彼を選んだ。それは自然な流れだと思ったし、私からしても、きっと彼は私より彼女といた方が幸せになれるのだろうな、とうまくいかなかった二人の生活を思い出せば断言できる。

　でも。

　私はどうしても彼女に対する嫉妬を消すことができない。彼女はいつもそうだった。私の持っていないものを持っていたし、私が得ることのできないものを得てきた。
　私が幸せにできなかった彼を、彼女は幸せにしている。

　それがどうしても我慢ならなかった。

　彼がいっそ私の知らない人を選んでくれたらよかった。彼を嫌いになればよかった。でも、私にはめずらしく、思ってもないことを言えない。彼は私のもとにいて欲しかった。彼女のもとへなんて行って欲しくなかった。自分勝手なわがままだとはわかっている。
　彼女は悪くないのだ。そして彼も悪くはない。きっとこれは仕方のなかったことだし、もちろん私も悪くない。悪いとすれば私が抱く嫉妬の気持ちだけだ。いや、きっとそれも悪いわけではないのだろう。

　素直に言おう。私にはとても難しいことだけれど、素直に自分の気持ちを言おう。私は、彼に戻ってきて欲しい。もう一度やり直すチャンスが欲しい。

　でもきっと、無理。それもよくわかってる。彼女が消えてくれない限り、きっと彼の視界に彼が入ってくることはない。

　彼女が消えてくれない限り。

　あれだけの長い時間をともにすごした友人に対し、そんな気持ちを抱いていることに気付いたとき、私の視界は徐々に白くなっていく。貧血。何年ぶりだろうか。
　視界を白が侵食していく中で、私はそれでも彼女に消えて欲しいと願っていることを確信する。

夫

　あの女と離婚してから2年が経った頃、あの女の友人でもある彼女と付き合い始めた。俺達は高校時代に知り合った3人で、大学を卒業してから俺とあの女は結婚を決めた。
　結婚したことは失敗じゃなかった、なんて綺麗事をいうつもりはさらさらない。俺はあの結婚を後悔しているし、できるならば記憶の中からも記録の中からも消し去ってしまいたい箇所。俺は今でもあの女を認めることも理解することも出来ない。そして、嫌いだ。

　彼女との交際は、恐らく俺が30年近く生きてきた中でもっとも理想としていたものに近い。距離感も、信頼感も、与えられるものも、与えるものも、すべてにおいてバランスが取れていたし、完璧とすら形容したくなるほどのもの。
　彼女と交際を続けることで、俺はますます、あの女との交際を、結婚を激しく悔いるようになった。いや、あの結婚がなければ今の状態はなかったのかもしれないから悔いてはいけない性質のものかもしれないが。

　あの女とは大学が同じだったから、俺とあの女の間には共通の友人が何人かいる。俺に話を伝えてくれたのもそんな友人の中の1人だ。
　離婚してから連絡はとっていなかったし、彼女もあの女に対して連絡はとっていないという。それでも、あの女は俺と彼女の交際をどこかで耳にしたらしい。
　彼が伝えてくれたのはさらに一歩踏み込んだ内容のものだった。
　あの女は彼女が俺をあの女から奪ったと思い込んでいる、という。周囲には「奪われた」と話し、「夫は騙された」と言いふらしているそうだ。
　俺はその話を聞いたとき、呆れると同時にどこか安堵を憶えた。あの女は常に自分を被害者に仕立てようとする。謝ったり頼んだり、頭を下げることが出来ない あの女は自分を正当化することで頭を下げる必要から回避できると思い込んでいたのだ。そして、俺があの女と別れた理由もそこにある。
　自分があの女に見切りをつけた原因を、あの女が未だに抱えていることには呆れてしまうし、その事実からは自分の見立てが間違っていなかったという確認が得られ、俺は安堵する。

　もちろん、彼女と交際を始めたのは離婚してから数年も経ってからのことだし、周りの人もそれは理解を示しているところ。だから誰一人としてあの女の声に耳 を傾ける人などいなかった。あの女は自らを正当化し、非の打ち所のない正当性を得たがゆえに誰からも理解を得られなくなってしまった。悲しい話だ。

　その後、あの女の話は聞かなくなった。誰からも相手されなくなり興味を失ったのか、新しい相手を見つけたのか。どちらにせよありがたいことだと思い始めた頃あの日が目の前に訪れる。

「大丈夫、あなたが悪いんじゃないって知ってるから」

どうしてこの女は俺の居場所がわかったんだ。改札を抜けて目の前にあの女が現れた瞬間、俺はそのことに恐怖を覚える。

「あなたが騙されたんだってちゃんとわかってるから」

通り過ぎる人がこちらをちらちら見ながら歩いていく。それはそうだろう。明らかに目の前の女は常軌を逸した雰囲気を醸し出しているのだ。このままここにいると警察すら呼ばれかねないと俺は思い始める。

「でもね、寂しかったんだよ。それは謝って欲しいな」

この女は目が、おかしい。手先も震えている。本能的な何かが危険を告げる。体が自然と反応し、片足を一歩後ろに引く。女がそれに気付く。

「そうだよね。いきなり現れてもびっくりするよね。構えちゃうのも仕方ないよ。だからぜんぜん気にしない」

腕を後ろに回したまま動かさないことに気付き、背中を汗が伝う。俺はここで刺されるのか。最悪の事態だけが頭に浮かぶ。体は自然と警戒レベルを上げ臨戦態勢に入る。

「あなたを殺したりなんかしないよ」

女が微笑む。

「あなたを殺したら、意味ないじゃない。もう、殺しはしないの」

目の前の女が何を言っているのかわからなくなる。足が震え始める。

「死ぬべき人はもう、死んでいるから大丈夫よ」

「何を言っているのかわからないって顔してるね。教えてあげるからついてきて」

呆然とする俺の腕を神業の如き速さで取った女は、俺を先導して歩き始める。なぜか俺には抗うことが出来ない。
体が言うことを聞かない。いや、何かを体に伝えることが出来ない。意識が薄れていくのがわ

かる。

「そうそう、あの子、かわいそうにね。通り魔だってさ」

女が目の前で笑う。意識が加速度をまして俺から離れていく。